



菅沼の世界遺産を 次世代に引き継ぐ

菅沼集落は、平成7年に相倉と秋町とともに世界遺産「白川郷・五箇山の合掌造り集落」として登録されました。この世界遺産は、単に景観の美しさだけでなく、田畑や雪持林（ゆきもちりん）と呼ばれる防雪林、合掌の材料となる森や茅場といった山村集落を取り巻く環境の素晴らしさが評価されています。しかしながら、集落は現在5世帯27名と小規模で、住民の力だけでは維持していくことが困難になりつつあり、県の中山間地域チャレンジ支援事業を活用した「合掌の森（茅場）」再生に取り組んでいます。

『合掌の森』を再生する

五箇山では、古くから各戸において合掌造りの屋根材となる茅（コガヤ）の採取場（茅場）を所有し、下草刈りなどの手入れを行って、大切に管理されてきました。

昭和40年代に入り、戸数の減少や高齢化等により、管理が徐々に行えなくなり、現在は、多くの茅場の管理は富山県西部森林組合に委託されています。また、放棄された茅場も増加しています。現在の茅の自給率は40%程度に低下しています。（菅沼集落は約50%）

不足分は県外からオガヤ（ススキ）を代用品として購入しており、より本物の世界遺産（真正性）を次世代に引き継ぐためにも、合掌の材料となる

茅の自給率向上が叫ばれるようになりました。

このような背景のもと、菅沼集落では、住民による「越中五箇山菅沼集落保存顕彰会」が中心となって、23年度から「合掌の森」再生に向けての取り組みを始めました。

まずは住民みんなで古くから茅場管理の方法を学ぶ勉強会を開催したり、他集落の茅場等の視察などを実施しました。また、実作業には、他地域から多くの団体や企業に協力していただけるようになり、世界遺産保全のための新たな合力（コーリヤク）が出現し始めています。

中山間地域チャレンジ支援事業とは

過疎化・高齢化が進行する中山間地域では、担い手不足が深刻な状況にあり、農業生産活動の継続はもとより、集落の維持も困難になりつつあります。

このため、本事業は、集落のみならず地域内外の企業や団体等の新たな担い手と連携して行う地域活性化活動を支援することにより、集落の維持・活性化を図ることを目的としています。



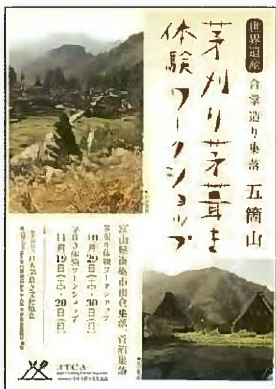
▲住民による茅場再生に向けての勉強会（H23）



新たなコーリヤクの形を求めて

都市住民との連携

23年度から、(社)日本茅葺き文化協会の協力を得て、「茅刈り体験ワークショップ」を実施しています。1泊2日で参加料1万円(交通費は自己負担)にもかかわらず、大変な作業を手伝いに全国各地から多くの方々に参加いただきました。



▲ワークショップのチラシ

企業との連携

24年度より、中日本高速道路(株)(NEXCO中日本)と越中五箇山菅沼集落保存顕彰会との間で、地域の環境整備活動等を取り組む旨の協定を締結し、茅の再生・活用に関する取り組みを始めます。

具体的には、9月に茅場の下草刈り、10月に茅刈りと茅葺き体験、11月に茅株の採取と株植え作業の活動を実施しました。



▲NEXCO中日本との協定調印式(H24年9月)

大学との連携

23年度からは、2年連続でコーリヤク隊と称して筑波大学の学生に茅場の下草刈りの協力をいただいております。これ以外にも五箇山の他集落で楮(和紙の材料)の下草刈りや棚田の草むしり作業等を手伝っていただくなどとても頼もしい助っ人です。夜には、住民との懇親会もあり、若者との楽しい交流の機会となっています。



▲筑波大学のコーリヤク隊との茅場下草刈り



▲筑波大学のコーリヤク隊との懇親会

『合掌の森』再生のながれ

越中五箇山菅沼集落保存顕彰会では、23年10月、菅沼集落展望広場の向かいに新たに茅場を造成(約1000㎡)し、多くのコーリヤクをいただきながら、草刈り、茅株の採取・株植え(計300株程度・成長すれば200束程度)作業を実施しました。茅株を植えてから刈り取りが出来るまで成長するには、約5年かかると言われており、以後は、毎年刈り取り可能となるそうです。

それまでは、既存の茅場の刈り取り体験を実施し、刈り取った茅は、冬場の雪囲いとして利用し、春に乾燥した茅を使って屋根葺き材として利用します。また、交換した古茅は、昔から畑にまき、肥料として使用され、土に帰ります。まさに「合掌の森」は究極のエコ循環です。



▲下草刈り作業(6月~9月:2回程度)



▲茅株の採取作業(11月中旬)



▲茅株植え作業(11月中旬)



▲茅刈り作業(10月下旬~11月上旬)



▲茅雪囲い作業(10月下旬~11月上旬)